

楽石雑筆にみる君津地方の遺跡調査

光江 章(財団法人 君津都市文化財センター)
酒巻 忠史(木更津市教育委員会)

はじめに - 楽石雑筆とのかかわり -

光江 章：それでは、「楽石雑筆にみる君津地方の遺跡調査」ということで始めさせて頂きたいと思います。

まず始めに、お手元にあります資料に4名(光江・酒巻・甲斐博幸・稲葉昭智)連記してあります。実はこの4名で『楽石雑筆』を中心にした資料収集とか情報交換で集まりを持っております。本日は都合により出席できませんので、私と酒巻がその4人の代表という事で報告させて頂きます。

まず『楽石雑筆』との関わりですが、木更津にあります菅生遺跡の記述がかなり多くあることは、以前から知られていました。『袖ヶ浦市史』の編纂の過程で、改めて『楽石雑筆』を読んでいますと、菅生に関する記述だけではなく、木更津市内のこれまであまり知られていなかった遺跡の記述ですとか、木更津市内の町の様子とか、そういったものがかなり書かれていますので、非常に興味深いものでありました。

そこで、考古学関係の検討の他に、色々な面からの情報交換を考え、さらに、その情報交換したものを共有化し、将来的にはどういう形になるか分かりませんが、公表も念頭にいた上で一応複数の人間で検討していった方が良いのではないかということで、上に挙げております4名で集まりをもっている訳です。

特に情報の共有化という点でいいますと、個人で、話としては色々知っているんですけども、情報として活かされていないということは、我々の身近でも目にします。個人的に知っていることや、地元の伝承とか言い伝えみたいなものは、その場や個人の段階で途切れてしまえば情報としてはおしまいだ、という部分があります。この場をお借りして、皆さんに知って頂くという非常に良い場を与えて頂いたことを有難く思っております。

それでは、私は「君津地方と大場磐雄」、それから「遺跡調査と大場磐雄」の中で丸山古墳についてのお話をさせて頂いて、その後酒巻に代わりたいと思います。宜しくお願いします。

1. 君津地方と大場磐雄

まず、表1をご覧ください。大場磐雄氏の足跡としましては、まず昭和3(1928)年に木更津の方に来られているんです。これが一番最初ですね。この時は丸山古墳というところの資料を見ただけで、特に調査・発掘等はされていません。その後、遺跡の発掘などをされるようになるのが昭和8(1933)年からです。昭和8年から昭和13年にかけて、主に菅生遺跡の調査を中心にされております。

図1に示しましたように、君津地方は千葉県のほぼ東京湾側の中央辺りに位置します。北から袖ヶ浦市、木更津市、君津市、富津市。この4市を一応君津地方と呼んでおりますけれども、この地域を中心に色々調査されております。この他には、千葉県内では銚子ですとか、それから館山方面もかなりいらっやっていますようですが、我々は『楽石雑筆』の中から特に君津地方の資料だけを丹念に読み込んでいますので、他の地域の事についてはあまり深く検討しておりません。

最初に大場氏が君津地方を訪れたのは木更津市の丸山古墳というところですよ。図1の上ではかなり込み入っておりますが木更津駅の東側にあたります。

それから、安房の方に行かれた際に途中、富津市の上総湊に一度立ち寄られて、その地元の方の資料を見たという記述ですとか、後程お話しします九十九坊廃寺、その途中で牛ヶ作窯跡、葎ヶ作貝塚といったと

ころを色々見て回っていらっしやいます。

菅生遺跡の調査は、かなり『楽石雑筆』の中に書かれているんですけども、その中で特に我々の興味を引いたのは、今まで知られていなかった古墳について写真を撮ったとか、それからその石室の細かい様子であるとか、そういうことが書かれている点です。こういった点で『楽石雑筆』を読むだけではなくて、こちらの大学所蔵のもので何か資料写真などがあるのではないかと、ということで杉山林継先生にお尋ねしたところ、偶然に画像データの整理をされているというお話でした。そこで写真を見せて頂いたところ、今まで見たことがない写真というのがかなりありまして驚いたという様な状況です。

2. 遺跡調査と大場磐雄

(1) 丸山古墳

まず、木更津の丸山古墳という、たまたま個人のお宅の庭先にあった古墳を掘ったところ、遺物が出てきた、ということです。表2「丸山古墳出土遺物一覧」という形で挙げてありますが、第1回、第2回、第3回と分かれて遺物が発見されたようです。このうちの第3回の資料が大場氏が実際に調べた資料になります。第1回の8月6日と8月13日の資料につきましては、『楽石雑筆』の中に資料に示したようなものが書かれてあります。

表の一番右に「東博所蔵品」という事で、現在東京国立博物館の方に所蔵されている資料を挙げております。土器については東博の所蔵品の中からは抜けておりますけども、第1回と第2回のものについては大体所蔵されているように思います。写真1・2は大場氏が撮影したもので、第3回のものにあたるかと思えます。写真1に須恵器が4点並んでいまして、その下に銅鈴が2点ありますが、これは東博の収蔵資料と見比べると、若干違いがありますんで、東博の所蔵品にはなっていないという事です。銅鈴が都合3個出ていますけれども、このうちの1点が東博所蔵品となっていますので、この2点については所在不明です。写真2ですが、これも東博の収蔵資料ではなく、須恵器については収蔵されていないという事がわかります。それと一番左側の、土師器の高坏だと思わんですけども、これは脚部に透かしが入っていて非常に珍しいものといえます。

君津地域では10例ほどですか、こういった資料があります(図2)。菅生遺跡でもこのような資料があるんですけども、丸山古墳から出ているというのは、私初めて知りましたので、この写真を見せて頂いて非常に驚いたというところが正直な感想です。

このように現在見ることが出来ない資料が、大場資料の写真の上では確認出来るということが分かります。それと同時に『楽石雑筆』を見ていきますと、写真と文字資料との対比で、非常に興味深いところが益々出てくるのではないかと考えています。

丸山古墳ですが、一応6世紀の中頃から後半にかけて、という年代観が挙げられております。今後、墳丘の測量とかというのが個人のお宅の中、という事でかなり難しい部分がありますので、これからのことについてはまた報告をしていかななくてはいけない部分かと思えます。

(2) 牛ヶ作窯跡

光江：次に「牛ヶ作の瓦の窯跡」と「九十九坊廃寺」について酒巻の方から報告します。

牛ヶ作の窯跡は、昭和8(1933)年11月九十九坊廃寺に行く途中、大場氏が立ち寄って瓦を確認しています。昨年(2002年)の12月に木更津市教育委員会で発掘調査を行ないました。これは大場氏が牛ヶ作の窯跡を訪ねて以来70年振りとなります。そういったところの発掘を担当した酒巻が居りますので、大場資料と、今度の発掘資料を比較して話してもらいたいと思います。

酒巻 忠史:木更津市の酒巻と申します。『楽石雑筆』の昭和8(1933)年9月10日の記述からです(史料1)。

大場先生が九十九坊廃寺に足を運んだのは2回でして、昭和8年9月10日と昭和8年11月4日・5日の両日です。

昭和8年9月10日は非常に暑い一日だったとあります。8時21分に、この日は両国を出発しまして、市川の方に寄って、市川を9時44分に出発して、11時に周西駅...今の君津駅です。周^{すえ}淮郡の西にあるという事で「周西」という様な言い方をします。周南、周西という様な言い方が今でもあります。周西駅に着きましたが、そこから迎えがないので法木作というところまで歩いていきます。3km位ありますけれども炎天下の中を歩いて行っている様です。

これらを全部読んでいきますと、大場先生は非常に行動力があって。今の我々より若い時だと思のですが、思い立ったらすぐ動く様な、今の私達も見習わなくてはいけない、非常に行動力に溢れた方だったというのが随所で分かります。

大場先生が来ることになりまして、地域の郷土史をやられている小熊吉蔵という方がいるんですが、その方が大場先生の為に場を設定しまして、遺物を全部集めてあげている。それから発掘を、地域の若い人間に頼んでやらせて、見せ場を作ったところに大場先生を呼んできている、という様な状況がよく分かります。

國學院大學の方からご提供頂いた写真をもとに、そのつき合せを『楽石雑筆』の記述としましたけれども、その史料と、牛ヶ作瓦窯址の方は昨年12月に掘ってみる事が出来たので、それを合せてご紹介致します。

昭和8年の11月26日に波岡村から八重原村へ、という事です(史料2)。今度は牛ヶ作という所がありまして九十九坊に瓦を供給した窯があるという場所を見学をされている様です。この日は小熊氏とは会う事が出来なかった、という風に書いてあります。最初に、この人物が誰かといいますが、この日は篠崎四郎さんと服部という方とそれから大場先生と3人で行動を共にしています。

写真3をご覧ください。小熊吉蔵さんには会えなかったと書いてありますので、この中には小熊さんはいなくて、一番右側の棒を持っている人がこの土地所有者の中原春次さんという方で、現当主のお父さんにあたる方なんです。それから、真ん中に手ぬぐいみたいなものを持って立っている方が篠崎四郎さんですね。他の写真からもこのお顔で間違いありません。それから『楽石雑筆』の中に苗字しか出てこない。「服部君」とか「服部」とか書いてある方なんです。新聞記者ではないか、という風にも思うんですが、左から3番目のメモをとっている方です。左側の2人は恐らく地元の人だろう、と考えています。少し棒の先で掘っている様な状況ですけれども、この時、少し掘ってみただけでも何も出てこなかった。小さな瓦の破片と焼土が出ただけであったと書いてあります。

図4に牛ヶ作の現状図が書いてあります。大場先生達が撮られた部分というのが丁度この真ん中の部分です。それ以前に、大正時代に刊行された『君津郡郡誌』という本があるんですが、その写真にはもう少し上のあたりから瓦が沢山出ている様な写真がでておりまして、その場所ではないところをどうやら掘っているんです。

我々が昨年12月に掘った部分というのが、この大場先生が掘ったすぐ横の部分と、それからその一番北側に「瓦出土地点(地表からスコップ1・2回の深さ)」と書いてあるところを掘らせて頂いて、瓦が沢山出ました。図4の下部に断面図があると思うんですが、なだらかな傾斜地に窯が存在したと考えられまして。大場先生はこの田圃の部分の、丁度土手のはじっこを掘っている。私達が掘りました土蔵の下というところからも、土蔵の横のところからも瓦が出てきました。

この断面図の一番上の「君津郡誌発掘推定地」というところは既に県道の土手で埋まってしまっているけれども、これを結ぶとほぼ一直線になって、登り窯の一部とそれから灰原の一部という様な関係になるかと思えます。

(写真4)これが東側から撮った写真で、恐らく昭和2(1927)年に刊行された『君津郡誌』というのに載っている、沢山瓦が出た、というのがこの辺、この上の段だと思うんですが、どういう訳かこの後一行はこの下の部分を掘っています。この中原さんが『君津郡誌』の写真にも写っていますね。かなり瓦を沢山掘り出している写真を撮っている様な状況もあるんですけども、先生達の一行はどういう訳か、その場所ではないところを掘っている様です。

これに写っているのをよく見て頂きたいんですが、先程は5人の人間がいたんですが、この時点では3人になってしまっていて、地元の人は何も出てこないからどうやら帰ってしまったようです。ここに人が、籠かなんか背負っている様な人が写っている様なんですが、どうやら、もう何も出てこないから、という事で帰ってしまったのではないかと、思えます。

(写真5)現在の同じ場所から撮った状況ですね。先程の、人が登っていく坂道というのがここで、生垣がカーブして残っている。先生方が掘った場所というのが恐らくこの部分で。当時は、田圃がこういう風に広がっていたのが今はこの道路を造る為に埋立てられてしまっています。

(写真6)逆側から撮ったものです。元々はこれが随分こっちまで開いていたんですが、全部埋めてしまって。今は道路を作ってしまった、という様な状況です。

(写真7)これが幅が70cm位のトレンチで、大場先生達が掘った近くですね。左上なんですが、ここまですが田圃の層ですね。これが田圃の耕作土で、その下から瓦が沢山出て来ました。ですから先生達は恐らくこの辺を掘っただけでやめてしまった様で、もう少し下まで掘れば、瓦が沢山出てきたのに、と分かりました。先生方が掘った様な形跡はなかったんですが、先程の、先生方が写っている写真には土の量がほんの少ししか出てこなかったの。やはりそこまでいっていないという事が分かります。

(写真8)土蔵の横のトレンチを撮った写真ですが、平瓦が歪んでくっついている写真があります。それと同じ様なものが実はここから出ていまして、5枚位、平瓦と丸瓦が潰れた様な状態でくっついています。丸瓦が扁平に開いてしまっているものもあります。

(写真9)窯址を北側から臨んだところです。両脇が山になっていまして、南北に長い谷の、一番谷頭の部分に窯があります。丁度東京湾からの北風が上手く入り込む様な位置に作られています。

(写真10)平瓦が5枚くっついている写真ですね。これは大場先生がお撮りになったものですが、現在所在が分かっておりません。

(写真11)軒丸瓦の焼き損じたものですが、これも大場先生がお撮りになったものです。

(写真12)これもそうですね。左側の軒丸瓦は写真11のものと同じですが、これは地元の波岡小学校という所に今でも残っていて、それを県立の上総博物館という所が借り受けておいて、それをまた借り受ける形で、久留里城址資料館という - 君津市立ですが - そこに今でも残っています。右側は平瓦が5枚くっついているものを反対側から撮ったものです。

(写真13)これが12月に我々が掘った時に出てきたもので、やはり同じ様な模様なんです。

(写真14)拡大です。割れてしまっていますけれども。

(3) 九十九坊廃寺址

まず、九十九坊という名前なんですが、これは大場先生もお書きになっているんですが、この地にかつては九十九の坊があって、大伽藍が存在したのではないかと、いう様な伝説が地域にあって、そういう名前

で呼ばれているのではないかと考えられています。塔が真ん中くらいにありまして、その西側に公民館を建てるので平成5(1993)年に調査をしましたところ、掘立柱の建物が沢山出てきました。こういう掘立柱が沢山あった状況を、沢山の僧坊が建っているということで九十九坊という風に呼んだのではないかと、というような想定が出来るかと思えます。

この九十九坊廃寺というのは、有名な内裏塚古墳群が富津の小糸川の河口の方にありますが、そこに前方後円墳をずっと造り続けて、その後方墳を造り、方墳の時代が終わった後に造られた最初のお寺です。7世紀の第4四半期ですとか、7世紀終末ですとか。そういう言い方をしますが、君津地方の中では非常に古いお寺の一つです。

(写真15)この写真は塔の基壇の写真ですが、これは9月10日に撮ったのではなくて、11月5日に撮ったのだと思います。これが塔の基壇とされているところでして、10年以上前に、発掘調査がありまして、確実に塔の基壇だということが分かったんですけども、図3にお寺の全体図がありますが、その右の真中辺りに「塔」と書いてある。これを東側から見た写真です。多分左側の人物が持っているのが2mのスタッフですが、高さが1m以上ある様な状況だったという点に分かると思います。

(写真16)現在の状態です。実際はもう少し、この画面の左側から撮った写真だと思うんですが。当時はかなり周りに林があった様ですが。多分戦時中の...色々、材木が要るというような事情で全部刈り取られてしまったのではないかと思います。先程の写真にはかなり背後に林が写っていた様なんですが、今ではこういう状態になっております。

(写真17)逆から見た、南側から撮った写真です。この山並みを覚えておいて頂きたいんですが。この山並みが次の写真で分かると思います。

(写真18)ここに同じ山並みがあると思うんですが。写真18には塔の基壇が写っていましたので。もう少し画面の左側から撮った写真だと思うんですが、今では人家が建っておりまして。撮ることが出来ませんでした。

(写真19)これが千葉県教育委員会の方で学術調査を行なった時の写真で。塔の基壇を綺麗にした写真です。森本和男さんが書かれたこの報告書(『君津市九十九坊廃寺址確認調査報告書』千葉県教育委員会1985年)がありますが、この報告書から引用したものです。

(写真20)これは大場先生が撮られた写真で。真ん中の心礎の礎石ですね。

(写真21)これが千葉県が掘った時の同じ石です。

(写真22)半分埋まった状態の、写真21のまだ掘り出していない状態です。こういう写真もあります。

(写真23)近くの家にあった「犬石」と呼んでいるものです。「犬石」とか「牛石」とかいう風呼んでいる例があるようです。上総の大寺廃寺にも「犬石」と呼ばれている同じ様な石があるんですが。塔以外の建物に使われた礎石を地元の人が掘り出して、色々なものに転用しているものだと思います。

(写真24)これは最近の写真で。塔の近くにこの様な大きな、一抱えもある様な石が幾つか残されておりまして。これは二つありますが、こんな大きな様な石です。こういうものを指して「犬石」と呼んでいると思います。

(写真25)これもそうですね。ここにカメラのキャップがありますけれども、こんな大きな石で。すぐ塔の基壇のすぐ近くに半分埋まった状態で残っております。かなりの数が近くにあるという記述が見られます。

(写真26)これがですね、1回目の調査の時に瓦を出してきて、見せてくれたとあります。そして写真を撮りましたということが書いてあるんですけども。地蔵堂というところに安置していた瓦ではないかと思えます。

左側の軒丸瓦につきましては、県立房総風土記の丘というのが龍角寺の近くにありますが、そこに今入っております。右側の軒平瓦については、所在が分かっておりません。この左側と同じ様な瓦が國學院大學の考古学資料館にも1点入っておりますので、御覧になると良いかと思えます。

おわりに

光江：入れ替わりで申し訳ありません。今話しました様に、我々4人で『楽石雑筆』の君津地域の部分を中心に、文字史料とそれから國學院大學からご提供頂いた写真資料に基づいて、検証を細かく行いながら、まず『楽石雑筆』の記載に従ってやっているんですけども、A4サイズで、君津地方の記事だけ抜き出しまして34頁とかなり膨大な量になります。大半が菅生遺跡関係のもので、それについてはまたおいおいという事も考えていますけれども、取り敢えず、九十九坊廃寺、牛ヶ作、丸山古墳という風に進めています。

『楽石雑筆』の中を読んでいますと、先程冒頭の方でお話しました様に、古墳の記述というのかなりあります。菅生遺跡の調査をやっている時に、相里古墳ですとか松面古墳という古墳の調査をされています。これは1日か2日位の調査で、我々の今の感覚からいうとかなり違いがあるんですけども、こういった古墳の調査をされています。というのは多分、大場先生という、東京から著名な方が来られたのだからこの機会に調査をやらしてもらおうじゃないか、ということで古墳の調査をお願いしたんじゃないか、という風に思います。

それと同様に、菅生遺跡の調査の方で、酒詰仲男さんが参加されているんですけども、やはり酒詰さんも君津市の小櫃という所ですね。図1をちょっともう一回開いて頂きたいんですけども、今お話しました九十九坊廃寺が真ん中辺りにありますが、「九十九坊廃寺[君]」の右側にJRの小櫃という駅があります。その辺りの小学校の校庭から弥生式の竪穴が出たという事で、その小学校の校長先生が発掘を依頼してきてまして、昭和13(1938)年の8月に酒詰さんと江藤さんという方が2日間で発掘をやっています。

君津地方では、住居址の調査としては一番古い事例ではないか、と思われまので、今後はこういったものも活用していきたい、と思っております。

今までの活動の現状をお話するという事で、纏まりがありませんでしたけれども、これで終わりにしたいと思えます。

表1 大場磐雄の足跡

昭和3年9月9日	木更津行 丸山古墳 [木]
昭和7年3月6日	安房行
昭和7年7月24日	安房三遊記 上総灘 [葛]
昭和8年7月13日	千葉県下周遊記 富津古墳群：西原古墳・内裏塚古墳・割見塚古墳・ 向原古墳 (宮原古墳)・宮原二号墳 [葛]
昭和8年9月10日	九十九坊廃寺跡調査
昭和8年11月4～5日	九十九坊廃寺 [君]
昭和8年11月25～26日	九十九坊廃寺跡再調査
昭和9年2月10～11日	九十九坊廃寺 [君]
昭和9年2月10～11日	波岡村より八重原村へ 蔵ヶ作貝塚 [木]、牛ヶ作窯跡 [木]
昭和9年2月10～11日	大寺調査
昭和12年11月23日	大寺廃寺 [木]
昭和12年12月12～13日	中郷村予察記 菅生遺跡 [木]
昭和13年1月23～24日	菅生遺跡 [木]
昭和13年1月23～24日	清川村第三回調査
昭和13年2月5～7日	菅生遺跡 [木]
昭和13年3月3～14日	清川村第四回調査 菅生遺跡 [木]
昭和13年4月8～25日	清川村第五回調査 菅生遺跡 [木]、祇園上深作貝塚 [木]
昭和13年5月6日～5月13日	清川村第六回調査 (第二期) 菅生遺跡 [木]、松面 (元新地) 古墳 [木]
昭和13年7月13～31日	清川村第七回調査 菅生遺跡 [木]、相里古墳 [木]、大塚古墳 [木]
昭和13年10月6～8日	菅生第三期調査 (第八回) 菅生遺跡 [木]、松面 (元新地) 古墳 [木]、滝ノ 口子持勾玉出土地 [袖]、真里馬古墳群 [袖]、山行 貝塚 [袖]、鏡ヶ峯古墳 [袖]
	菅生調査 (第九回)
	菅生遺跡 [木]

表2 丸山古墳出土遺物一覧

第1回 (8/6)	第2回 (8/13)	第3回	東博所蔵品
武器	直刀 5本 直刀 長さ分 2本 直刀 短 2本 直刀 破片 7、8本 鏃 (片共) 100個	直刀片 数個 鏃 (片共) 数個 刀片及び金具 (鍍金) 2個	直刀残片 1点 直刀残片 一括 刀装具残欠 一括 刀装具残欠 一括 銀装 刀装具残欠 一括
装身具	金環 1個 曲玉 2個 瑪瑙破片 1個 (琥珀ならん)	金環 6個 曲玉 2個 瑪瑙完 1個 瑪瑙片 4個 (コハクならん)	金環 8個 勾玉 2個 切子玉 (水晶) 1個 切子玉 5個 コハク玉 1個 小玉 一括
	瑪瑙小玉 16個 緑小玉 2個 (ガラスか) 白小玉 4個 (ガラスか)	ガラス小玉 15個	
	銅鈴 1個	銅鈴 2個 鉄鐔片 1個 石突 数 銅製品 1個 銅塊 1個	銅鈴 1点
土器	皿 (大小) 6個 皿破片 1 高坏 12個 高坏 6個	皿 9個 高坏 2個 破片 6個 高坏蓋 4個 破片 4個	高坏 (蓋付) 3個 埴盆高坏数個 (片共) 台付埴 (蓋付) 1個 台付埴 (ナシ) 1個 俵壺 1個 甕 (小形) 1個
その他	平瓶 3個 皿 (大) 1個 皿 (中) 1個 皿 (小) 1個		甕石 (自然) 1個

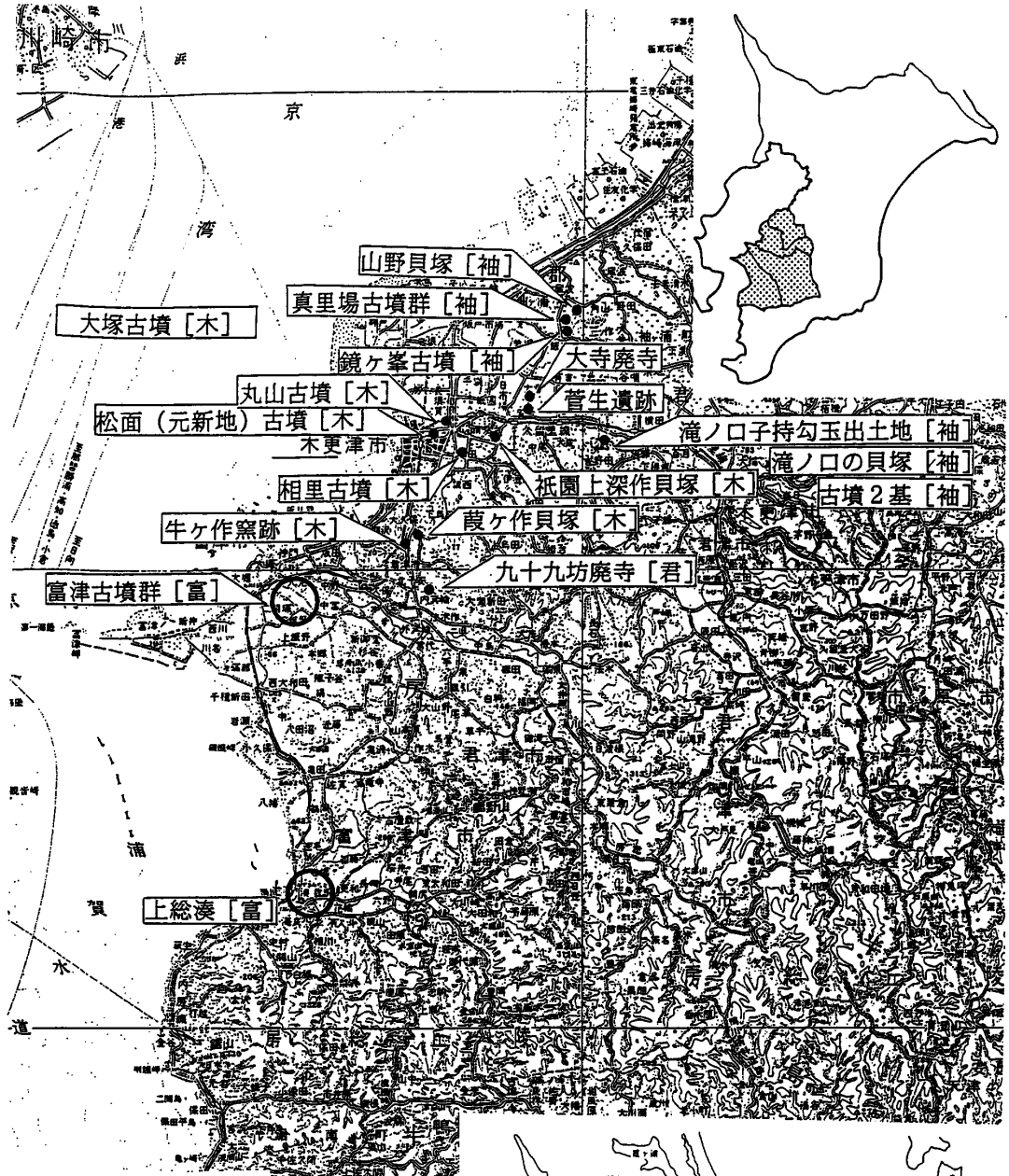
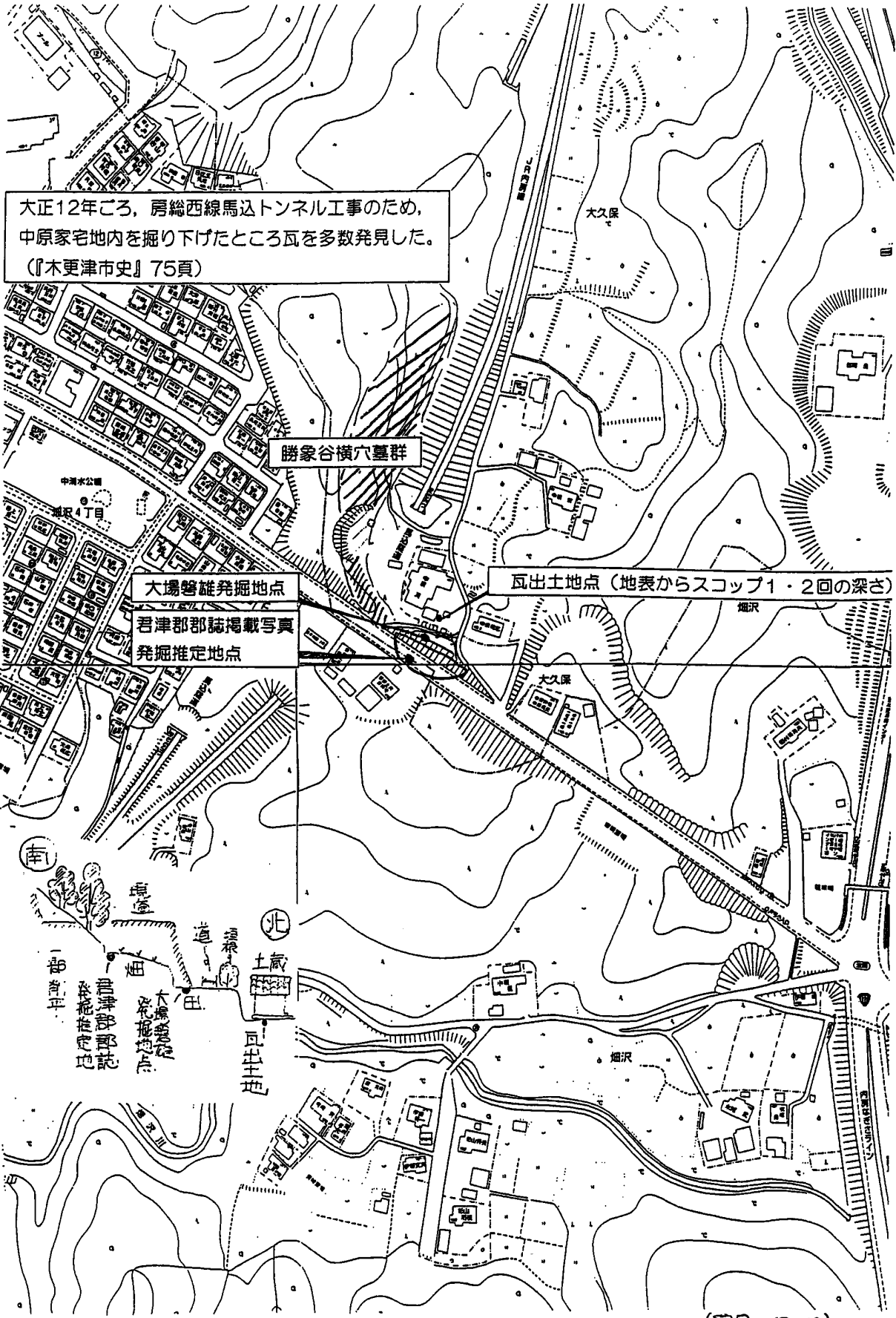


図1 君津地方遺跡分布図



図2 透孔高杯分布図



大正12年ごろ、房総西線馬込トンネル工事のため、
中原家宅地内を掘り下げたところ瓦を多数発見した。
(『木更津市史』75頁)

勝象谷横穴墓群

大場磐雄発掘地点

君津郡誌掲載写真
発掘推定地点

瓦出土地点 (地表からスコップ1・2回の深さ)

図3 大久保牛ヶ作瓦窯跡現状図 (附聞き取り調査報告)

(縮尺 1/3,000)

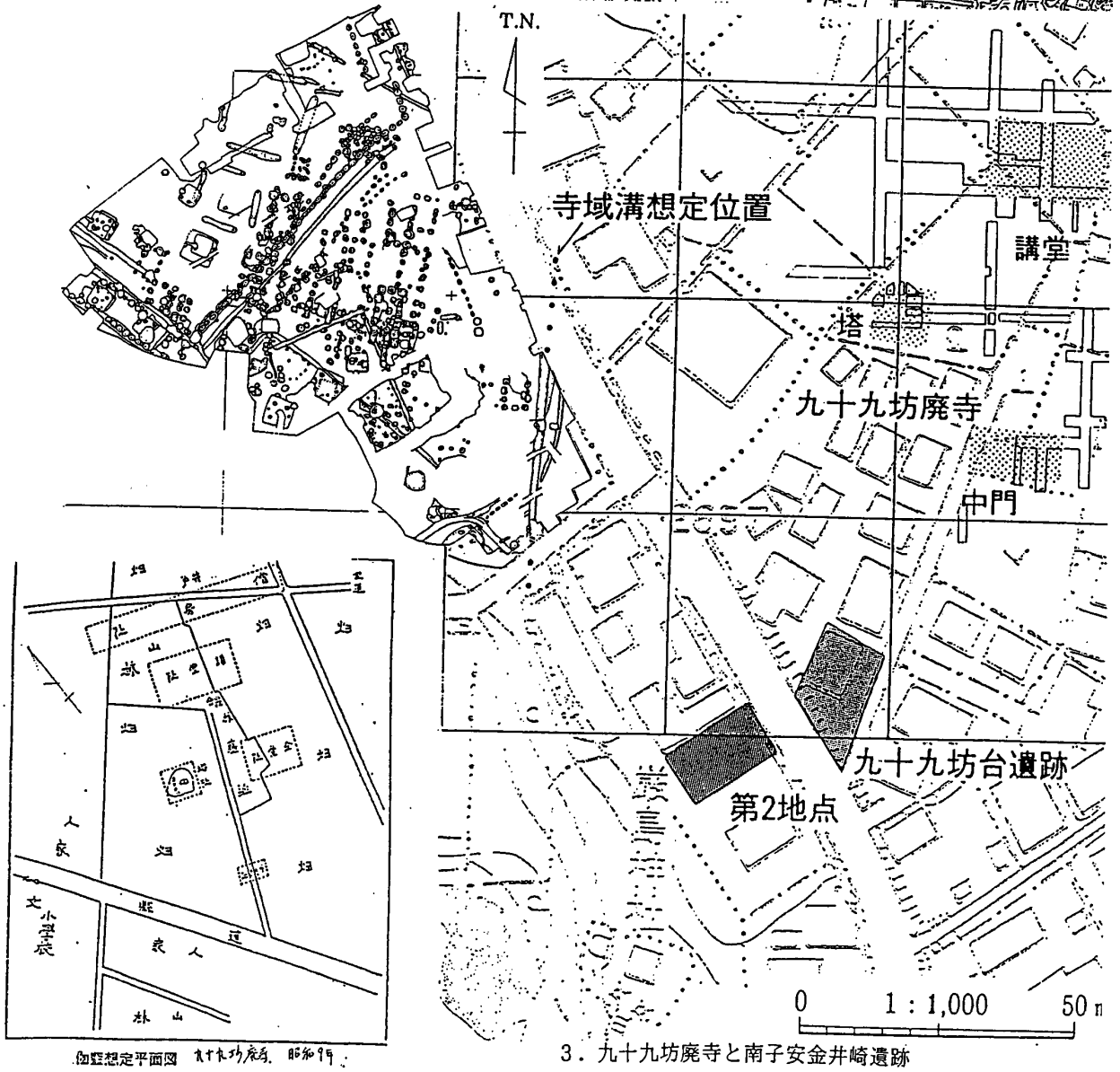


図4 九十九坊廃寺跡関連図

九十九坊廃寺跡調査
坊廃寺跡の調査を行う。

◎九月十日、かねて調査を思い居たりし千葉県君津郡八重原村大字箕輪字九十九坊廃寺跡の調査を行う。

之より先、同地の研究家小熊吉蔵氏と打合せおき、当日八時二十一分発にて行かんとして函館へ着きしに右は夏期の中みにてなし。九時二十八分迄待たざるべからず、折よく国大の守谷氏、鈴木氏等と会い、共に市川下車、余は別れて弘法寺に行き久しぶりにて題目の板碑を見る。嘗て付近に三、四枚の板碑ありしに今は一枚もなし、なお境内本堂前右手に「二葉楓」と刻する石あり、石棺(刳抜)らし。

九時四十四分市川発、十一時四十分周西駅着、何人も迎えなきを以て徒歩にてゆく、直熱やぐが如く流汗甚し。漸々八重原村法木作の岐路につくに茶店に小熊氏の姿あり、嬉しやと挨拶をのべ休憩す、間もなく同村長齋藤氏も来り、共にバスにて役場へ赴く。有志十数人待ち受けたり。一同に会釈して直ちに陳列の遺品を一覧す。

第一に注目し上りしは波岡村大字大久保字牛ヶ谷発見の古瓦類にして一は硫瓦なれど全体ヒドを入りて割れ目入り、又丸瓦の五枚融着せるものにして高度の熱にあいたるもの、明かに窯跡発見遺物にして九十九坊出土のものと同型同文様なり、この地は傾斜せる丘陵の一端にして付近に良水あり、畑地の各所より多数の古瓦類を出土し、且つ木炭等をも伴う。八重原村よりは隣村にて距離も亦遠からず、蓋し九十九坊所用の古瓦窯跡なる事疑を入れず。次に九十九坊廃寺跡出土の古瓦類を見る。主として小学校付近出土のものにして硫瓦、花瓦その他あり、型式は重孤文を有する白鳳期ともいへべきもの往々火中せりと思わるゝものも存す。この地は今八重原村大字内箕輪字九十九坊に属し、役場より東方一二町、小学校より県道をへだてて存するなり。丘陵上にあり、西南に念仏池と称する湧水池あり傍に弁天堂あり、この池嘗て梵鐘投入して鎌倉建長寺に出現せりとの伝説を有す。又この地往昔は九十九の坊ありたる大伽藍存在せりともいふ、又畑中に土壇ありて鐘つき堂とも伝へ、源頼朝の為に焼失せる大寺ありしともいふ。

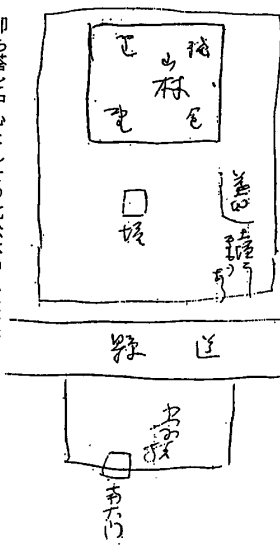
次に八重村三直新聞員塚出土品を見る。薄手式土器(主として安行式)を主とし、磨石斧、鹿角等あり。この記事は谷中国樹氏、考誌十九巻に報告せり。

写真をとりに一同に紹介され谷中氏、八重原小学校長などと名刺を交換し昼食の馳走に預る。午後二時頃一同と共に遺跡を探索す。余は先ず畑中に存する土壇に赴きて付近を見るに古瓦片散在せり。土壇の西端に巨石の存在を認め、ピッケルにて探るに上面に孔ありて青年団員に発掘を依頼して、更に付近をさぐる。土壇の北方二〇間程隔て一巨石あり。俗に大石といひ、もと畑地に存せしを掘り起してこゝにおけり、花崗岩の自然石にして表面平かなり。長さ一メートル、幅九〇センチ、高さ四二センチ位、蓋し礎石の一なるべし、その傍に小祠ありて地蔵堂となし中に付近発見の完全なる硫瓦及同破片類を安置す。先年大石を掘りたる際地蔵尊出現せるを安じて一時大いに信仰ありきと、なおきく所によれば付近の民家に牛石と称する石を存せりと、蓋し同様のものか。それより北は松林にして近年の植林にかかると、中に民家の墓地あり。藪草茂りて調査に困難なりとす。きく所によれば植林の際巨石を存し一間おき位に並列せりと、又古瓦類も出土す。蓋し一遺構ありしなるべし。松林のつゞく所小径あり、後は畑地とす。畑の後は丘陵となる。

再びもとに戻りて土壇の状態を見るに西端の巨石は全部をあらわせども一部を欠損し、且つ傾斜せり、孔は径二〇センチ位にて礎石には相違なれども心礎とは認められず。故に更にその中央を発掘せしむ。余は更に県道を隔てり弁天堂より念仏池を見、小学校庭の一部より丘陵のつくる所古瓦の出土せる地を見る。こゝは土壇より西端約一丁余に当る。

畑に戻りて土壇の発掘を見るに中央に於て約三、四〇センチにして巨石の存在を知り、更に掘り広げしに柄穴の存在を認め、明かに塔心礎なるを確かめたり。又は凝灰岩にして西端に傾斜し、上面一部を欠きしが特に技巧を加えし跡なし。長さ一・九五メートル、幅六七センチ、穴は舟底形にくりて幅(径)五二センチ、深さ二〇センチ位その他何もなし。蓋し古瓦と並行する心礎といふべし。土壇は高約一、二メートルほど方形にして一辺約一〇メートル、一辺約一二メートル、心礎はほど中央に存す。蓋し先に掘

りたるものは側柱の礎石ならんか。一同歓呼して更に調査をすゝむ。時に地蔵堂安置の古瓦も保管者より鎌をひらきてとり出す。完全なるものにして型式も亦典型的なり。時に午後五時近し、小学校に入りて写真及拓本をとり更に自動車の来る迄一場の講演をなす。案ずるにこゝに奈良朝前期、一の大伽藍ありしは疑をいれず。試みにその遺構を推定せばほど左の如くなりしか。



即ち塔を中心としその北松林中に金堂、講堂の遺跡あり。県道をへだてり丘陵の一部(西南)に南大門あり、南は沖積層の田に面し、北は丘陵を負う。地形も亦よく適せり。古瓦の文様より見て竜角寺、木下出土のものと同様似し、又更に結城寺、薬師寺等とも匹敵せり。実に顕著なる一遺跡なるべし。しかしいかなる理由によりこゝに建立をみたりしか、蓋しこの地は古への周准郡に属し、なおこの付近に郡家あり。又和名抄の三直郷、湯行郷等あり。これ等古郷、古道、郡家と合せ考うる必要あり。又古墳の分布より地方豪族の分布を知る必要あり。蓋し郡家の所在と深き関係あるものならんか。

六時半頃一同に別をつけ、市原郡門田村市場より来れる河内竜彦君と共に帰途につく。

波岡村より八重原村へ

○十一月二十八日、考古学会にて講演
を行う事となりしかば、更に調査の必
要を感じ十一月二十五、六兩日を再び千葉県下ゆく。

◎十一月二十五日、午後正則中学校内に一場の講演を試み(芝公園を中心とする考古学上の遺跡遺物)、これより直ちに円タクにて両国駅へ赴き、服部君と逢い三時十二分発の列車にてゆく。途中一杯のむ、駅につきしは五時一分、それより松川旅館をたずねしに今なしという。やむなく黒板に掲示して余等二人は石井樓に泊る。まもなく篠崎君も来り、これより夕食、篠崎君は真野ヶ谷の寺跡を探查せりとて、その遺物を見せる。布目瓦と鬼板らしきものとあり。年代はやゝ降る如し。

十二時過迄大いに酔い且つ話して就床。

◎十一月二十六日、朝七時過起床、乗合にのりおかれてこれより二人は自動車にのり余は徒歩にてゆく。途中神社境内に横田楓江の碑を見又寺に狸塚を見る。これより余は服部氏の自転車にのりしが途中警官におこられバスにてゆき、波岡村に赴く。村に入り役場にて小学校の位置をきゝ道をすゝめば左手に貝殻の散布するあり。且つ標示ありて藪ヶ作貝塚と記す。余は直ちに入りて見るに丘陵の端に貝塚あり。貝は淡水産を主とし土器は縄文土器厚手末期と薄手と安行式あり、二、三採集す。これよりすゝみて小学校へ入る。訓導にきくに小熊氏来りて窯跡の方へゆけりという。我等も直ちに向う。某訓導の案内にて山道を越え波岡村大字久保牛谷の中原家にゆく。こゝにて小熊氏の所在をきゝ途中まで行きしが遂に逢う能わず、引返して再び同家に来り窯跡を見る。窯跡は同家の庭の一部より西方の崖にかけて存したるものゝ如く、殊に道路に面する田の開墾に際して古瓦多数を出土せりという。地は丘陵の麓東南に面して窯跡には好適の場所とす、少し発掘せしが何ものも得る能わず、僅かに小瓦片と焼クズ様のものを得たり。カメラに入れて去る。小学校に入りて古瓦及び石器土器類を見る。中に磨製石製の珍物あり。出土不明、又有頭有文石剣の破片あり共におもしろければ貸り受けて帰る。

再び県道に出で徒歩にて九十九坊へゆく。役場にてきくに小熊氏今朝より待ち居れりという。篠崎氏は中村大鷲の窯跡を見にゆき余は服部君と共に寺跡に来り。写真をとり又道傍を探る。役場吏員の案内にて八雲神社へゆく。途中堀の内なる山村中に土壘のあと歴然と残れる箇所あり。何人の居住跡か考うべし。薄暮神社にゆくに村長はじめ有志者祈祷の最中なり、やがて終りて一同社務所に入り直会を頂きつゝ種々雑談。時に社寺より神社蔵の土器(斎瓮)及び祭器と思わるゝ皿等を持参す、又一氏子総代は三直発見の磨石斧を持参し且つ同家(立川氏)に伝来する装束、布衣、采配等を持参せらる。なお古老その他より寺跡に関する伝説をきき(一)犬石はもと新御堂へ持ち去りしが鳴きやまざりし故もと一返せり。なお同堂には多数礎石を持ち去れりと

(二)寺跡の北方に存する井戸は戦乱の御宝物をなげこみたりと
(三)土壇上にありし鐘は弁天の池へ埋めしが後鎌倉橋材木座の光明寺に上つたと、今もありという

(四)八丁提にある礎石はもとシナリという力士担いでもちいけり
等

夜に入りて余等二人は辞し途中校長の案内にて法木作の伊藤貞一氏を訪い、同氏が年少の頃鎌倉光明寺にて内篋輪の鐘を見たりし事等きゝたり。更に外篋輪の小樽藤吉氏を訪い、同氏所蔵の「元禄七年甲戌七月廿二日、用水、裁許状」を見る。その裏に古図あり。明かに塔跡たりし事を窺い知り得られ、礎石の所在も見るを得て興味深し。雨来る。篠崎氏も合して三人共に乗合にて木更津より帰京。



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真 7



写真 8



写真 9



写真 10



写真 11



写真 12



写真 13



写真 14



写真 15



写真 16



写真 17



写真 18



写真 19



写真 20



写真 21



写真 22



写真 23



写真 24



写真 25



写真 26